
夏涼

美希マコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏涼

【Nコード】

N2262T

【作者名】

美希マコト

【あらすじ】

夏の涼しさを早めにお届け……！！

風鈴の音が恋しくなってきましたよね！！スイカ、花火、海……夏は最高だね！！

（この物語は、良い感じにラブイカップルの爽やかなお話です。）

私……見たんです。

そう、あれは蝉しぐれが降り注ぐ、日差しの強い夏の日の夜の事でした。

！……！

私は怖くなってその場から逃げ出しました。
でも付いてくるんです……足音が、ゆっくりと……ピタリピタリと付いてくるんです！……！

！……！

ココまでくれば……私は逃げる事に成功した。青いシャツの女性は追ってきていなかった。

30分後……そこには元気に走り回る青いシャツの女性の姿がッ
！……！

「ぎゃあああああああああああああああああ！……！」
「ぎゃあああああああああああああああああ！……！」

「……………」

「……………」

「だよね、1回くらい叫んどかないと気分でないよね？」

「いや、違うよ、今テレビは驚くところじゃなかっただろ！？お前の声に驚いたんだよー！」

「あら？そんなの??」

「てつきりGが出たのかと思った、焦ったあゝこええゝ」

「え、ホント!?!」

「かと思った!?!」 語尾注意!?!」

「はい」

「許す」

「……………」

「……………」

「ちょっと、お花を摘みに行ってくるわね」

「あゝ母の日の為に?」

「このツ!親不孝者ツ!それはもう過ぎ去ったわよ!?!」

「痛い、クッションで叩くな!! 早く茶摘みに行つて来い!?!」

「夏もちゝかずゝく、はゝちじゅうはちや」

「(パチ!パチ!)」

「行つてくるね」

「うん」

それから10分

「あれ？どしたん？マスクなんか付けて」

「コホッ、コホッ風邪を引きましたわ、コホッコホッ」

「ほお、それは大変だね」

「コホリコホリ」

「なあ？」

「コホッコホッ」

「口紅はみ出てんぞ」

「コホッコホ　え？」

「口裂け女だったら家から追い出す」

「　　」

「鼻歌止め！！」

「はい」

「……………」

「……………」

「顔を洗ってきなさい」

「うい」

それから10分

「……………」

それから更に10分

（遅いなあ……………ちょっと様子見に行くか）

スタスタと、洗面所へ向かう……………

しかし、彼女の姿はなく、水道の水だけが絶え間なく流れ続けていた。

これはおかしい、いったい何処へ行ってしまったのか……………とりあえず探そう。

まずは向かいのホームへ行ってみた。

……………。

誤解しないでほしい、名曲の話ではなく、単純に“向かいの家”の事だ。

その向かいの家こそがお互いの家なのだ。

ピンポン

やや古いタイプの呼び鈴は、少しのエコーを耳に残し、そして家の奥からは足音が近づいてきた。

ダツダツダツダ……と重い足音である。

普通に落ちをつけるならば、だいぶ前に本当にGが出てくるか、もしくはわ「かくれんぼでした」びっくりした!？」や「ハッピーバースデー!」みたいなオチャメ落ちだろうが、コレはそんな小さい話ではないのだ。

俺は心の中でハードルを上げ、作者はそのハードルの高さに驚愕し焦り始めた。

その時、ガチャリと扉が開いた　　!!
なんとそこ姿を現したのは、青いシャツの　　ではなく彼女と馴染みのある『葵シヤシ』だった。

「あれ??こんな時間にどうしたの??」
「通称彼女は家に帰ってますか??」

「うん、いるよ」

その言葉にホツとした、と同時に心が温かくなりホツとした。
よかった、本当によかった……だが水道を出しっぱなしにしていたのは良くないので叱ろうと決心した。

「上がっていいかい?」
「うん、いいと思うよ、私の家じゃないけど」

少し緊張するが、彼女の後ろ姿が見えた　　どうやらテレビ
を見ているようだ。

「おい、どうして勝手に出て行ったんだ!？」

「え、ああ〜だって……そうしないといけなかったから」

2人の間に微妙な空気が流れ始めた……。
葵シヤシ（ハーフ）は空気を読み「なんか……あれだから、向かいの家で待ってるね」と告げ、その場を立ち去った。

「おい、水道も出しっぱなしだったんだぞ」
「うん」

「反省は??」
「残りの半生で」

「よろしい」
「うい」

「じゃ、葵シヤシちゃん呼んでこようか」
「え?」

「ん?」
「誰??」

「葵シヤシちゃん」
「知らない」

「いや、さっきまで」
「きつとその子だ、足音がついてくるの!?!?!」

ダツダツダツダ、と重い足音が……走って向かってきている!!

！！！！！！！！！

「きゃあああああああああああ！！！！！！」
「ぎゃあああああああああああ！！！！！！」

ザーザーザーザー

一度砂嵐となったテレビが　また、始まった。

私……見たんです。

そう、あれは蝉しぐれが降り注ぐ、日差しの強い夏の日の夜の事でした。

「うけけけ、逃がさないわよ、一生繰り返さない」

私は怖くなってその場から逃げ出しました。
でも付いてくるんです……足音が、ゆっくりと……ピタリピタリと付いてくるんです！！！！

「うけけけ、あなたたちは永久に向かいの家を行ったり来たりするんだよ」

ココまでくれば……私は逃げる事に成功した。青いシャツの女性は追ってきていなかった。

30分後……そこには元気に走り回る青いシャツの女性の姿がッ！

!!!

「うけけけ、母さんはあなた達の交際を認めないわよッ!!!」

おわり。

(後書き)

適当に会話文を書いていたら、長くなったので1タイトル作ってしまおうと途中で思いつきまして……こんなことになりました。

余裕でハードルの下を歩くことに成功でしたが、なんでコツチの方向に行ったのか、良く分かりません。

今回のテーマは『テンポの良い短い会話(練習)』のはずだったんですけどね、ごめんなさい。タイトルは読めません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2262t/>

夏涼

2011年10月8日23時32分発行